



宮古諸島初記録のイトウダイ科魚類ホソエビス

本田康介¹・和田英敏¹

Author & Article Info

¹ 神奈川県立生命の星・地球博物館（小田原市）
KH: kosuke.honda01@gmail.com (corresponding author)
HW: wada.kpm-ni@nh.kanagawa-museum.jp

Received 19 July 2025
Revised 24 July 2025
Accepted 24 July 2025
Published 25 July 2025
DOI 10.34583/ichthy.57.0_40

Kosuke Honda and Hidetoshi Wada. 2025. First distributional record of *Neoniphon argenteus* (Beryciformes, Holocentridae) from the Miyako Islands, Japan. Ichthy, Natural History of Fishes of Japan, 57: 40–43.

Abstract

A single specimen (137.2 mm standard length) of *Neoniphon argenteus* (Valenciennes, 1831) (Beryciformes: Holocentridae) was collected from Irabu-jima island in the Miyako Islands, Ryukyu Islands, Japan. In Japan, this species has previously been recorded only from Okinawa-jima island and the Yaeyama Islands. This specimen represents the first record of *N. argenteus* from the Miyako Islands, suggesting that this species is most likely to be widely distributed in the Ryukyu Islands.

キンメダイ目イトウダイ科魚類は、三大洋の熱帯から温帯域に広く分布し（Randall, 1988）、日本近海からはこれまでに 41 種が知られている（本村, 2025）。これらのうち、国内では多くの種が琉球列島を中心とする南日本を中心に分布しており、同科魚類では琉球列島周辺海域が分布の北限と考えられる種も多い（林, 2013；江口・本村, 2016）。イトウダイ科の 1 種であるホソエビス *Neoniphon argenteus* (Valenciennes, 1831) についても、北限記録は沖縄島であるが（江口・本村, 2016）、本種は国内においてこれまで、沖縄島産の 3 標本、石垣島産の 7 標本、西表島産の 3 標本の計 13 標本が知られているのみであり（Shimizu and Yamakawa, 1979；江口・本村, 2016）、日本で記録されているイトウダイ科魚類の中では国内の記録が比較的少ない種である。

2025 年 3 月に宮古諸島伊良部島から得られたイトウダイ科 1 標本（以下、「記載標本」という）を精査した結果、ホソエビスに同定された。宮古諸島は、これまで本種の国

内における分布の空白地帯であり、得られた標本は同海域における初記録である。本種の分布北限海域における正確な分布記録は、本種の分散の過程や琉球列島における魚類の多様性を把握する上で重要であり、国内から記録の少ない本種の分布に関する基礎的知見の蓄積を目的として、ここに報告する。

材料と方法

標本の同定と各部位の計数・計測の方法は、Shimizu and Yamakawa (1979) にしたがった。計測はデジタルノギスを用いて 0.01 mm の精度で測定したが、本文中では四捨五入して小数点第 1 位までを表記した。鰓耙は標本の右側第 1 鰓弓を計数し、中央の 1 本は下枝鰓耙数に含めた。標準体長は体長または SL と略記した。前鰓蓋骨後縁の下方にある後ろ向きの 1 棘は、本田・和田（2025）にしたがい前鰓蓋骨棘と表記した。鮮時の体色の記載は、基本的に固定前に撮影されたカラー写真（Fig. 1）に基づき、一部、記載標本の生時の色彩的情報を付記した。色の名称は財団法人日本色彩研究所（1993）の系統色名を用いた。記載標本は神奈川県立生命の星・地球博物館の魚類標本資料（KPM-NI）に、画像については同館の魚類写真資料データベース（KPM-NR）にそれぞれ登録・保管されている。

なお神奈川県立生命の星・地球博物館（KPM）の標本と写真資料番号は、電子台帳上はゼロが付加された 7 桁の数字が使われているが、ここでは標本資料番号として本質的な有効数字で表した。

Neoniphon argenteus (Valenciennes, 1831)

ホソエビス

(Figs. 1, 2)

標本 KPM-NI 89077, 137.2 mm SL, 琉球列島, 宮古諸島, 伊良部島佐和田漁港, 2025 年 3 月 11 日, 釣り, 23:00 頃採集, 本田康介寄贈。

記載 背鰭鰭条 XI, 11；臀鰭鰭条 IV, 7；胸鰭鰭条 13；側線有孔鱗数 41；背鰭第 3 棘基部における側線上方横列

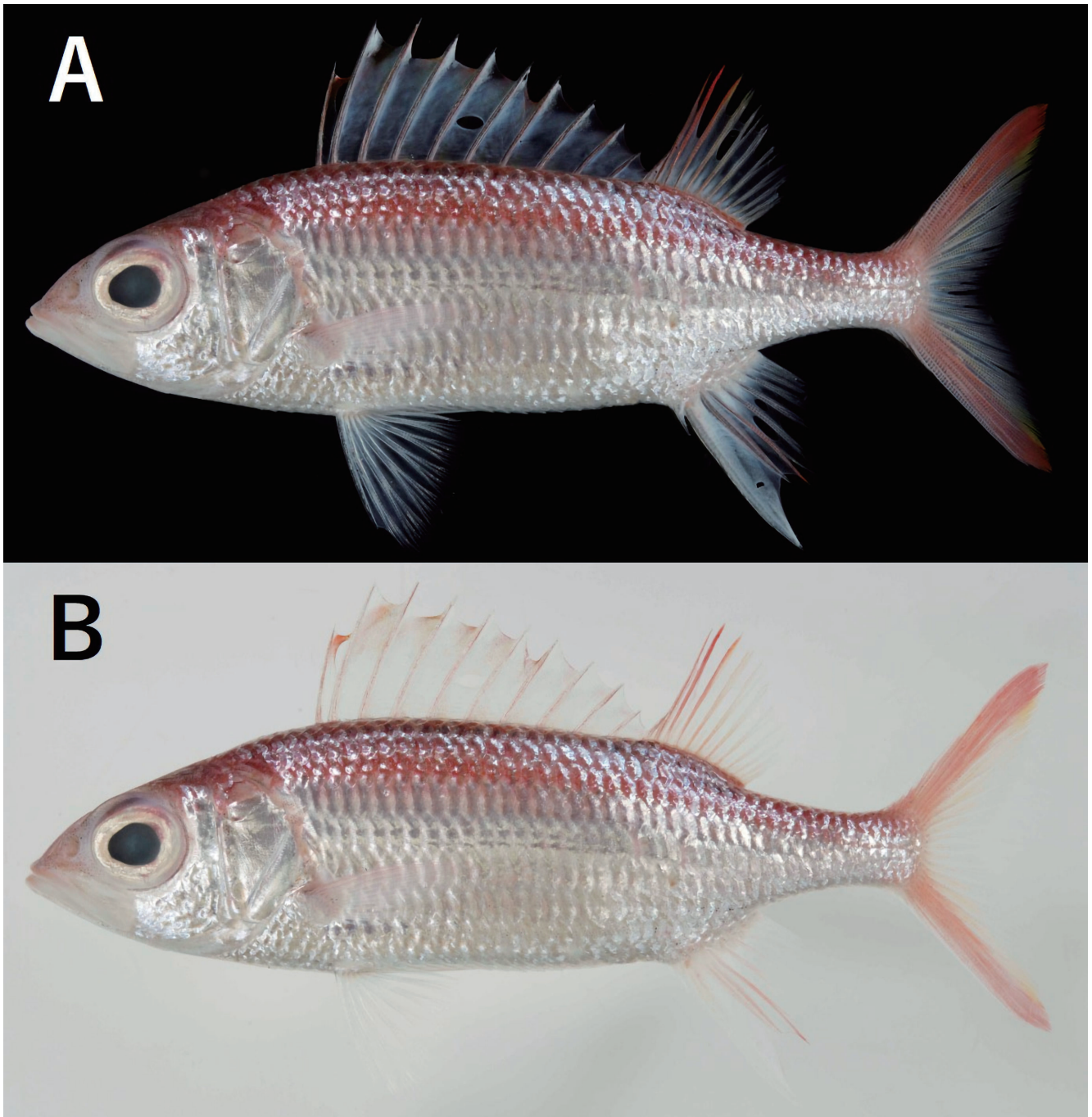


Fig. 1. Fresh specimen of *Neoniphon argenteus* from Irabu-jima island, Miyako Islands, Ryukyu Islands, Japan (KPM-NI 89077, 137.2 mm SL, photos by H. Wada). A, black background; B, white background.

鱗数 2.5; 側線下方横列鱗数 9; 鰓耙数 6 (上枝) + 11 (下枝) = 17.

体各部測定値の体長に対する割合 (%) : 体高 29.0 ; 体幅 16.0 ; 頭長 32.6 ; 吻長 7.9 ; 眼窩径 12.2 ; 両眼間隔幅 7.9 ; 上顎長 13.9 ; 前鰓蓋骨棘長 4.3 ; 尾柄高 8.6 ; 尾柄長 17.7 ; 背鰭前長 36.0 ; 臀鰭前長 71.9 ; 腹鰭前長 36.2 ; 背鰭第 1 棘条長 12.3 ; 背鰭第 2 棘条長 17.1 ; 背鰭第 3 棘条長 17.6 ; 背鰭第 4 棘条長 16.3 ; 背鰭第 5 棘条長 15.1 ; 背鰭第 6 棘条長 14.1 ; 背鰭第 7 棘条長 12.4 ; 背鰭第 8 棘条長 10.1 ; 背鰭第 9 棘条長 8.2 ; 背鰭第 10 棘条長 4.5 ; 背鰭第 11 棘条長 4.8 ; 背鰭最長軟条長 16.9 ; 臀鰭第 1 棘条長 1.1 ; 臀鰭第 2 棘条長 4.7 ; 臀鰭第 3 棘条長 24.1 ; 臀鰭第 4 棘条長 16.1 ; 臀鰭

最長軟条長 18.2 ; 尾鰭長 28.3 ; 胸鰭長 19.8 ; 腹鰭棘条長 15.3 ; 腹鰭最長軟条長 19.2.

体背縁は、吻端から背鰭第 3 棘基部付近まで体軸に対し約 25° の角度で弧を描きながら上昇し、背鰭第 3 棘基部付近で体高が最大となる。続いて、背鰭第 3 棘基部付近から背鰭軟条起部付近までは体軸とほぼ平行で、背鰭軟条部基底付近で体背縁はわずかにせり上がり、その後尾柄部にかけて緩やかに下降する。体腹縁は、下顎先端から腹鰭起部まで体軸に対して約 20° の角度で緩やかに弧を描きながら下降し、腹鰭起部から臀鰭起部までは体軸とほぼ平行。その後、臀鰭基底はやや急に上昇し、臀鰭基底後端から尾柄部にかけては、体背縁とほぼ対照的に緩やかに上昇する。

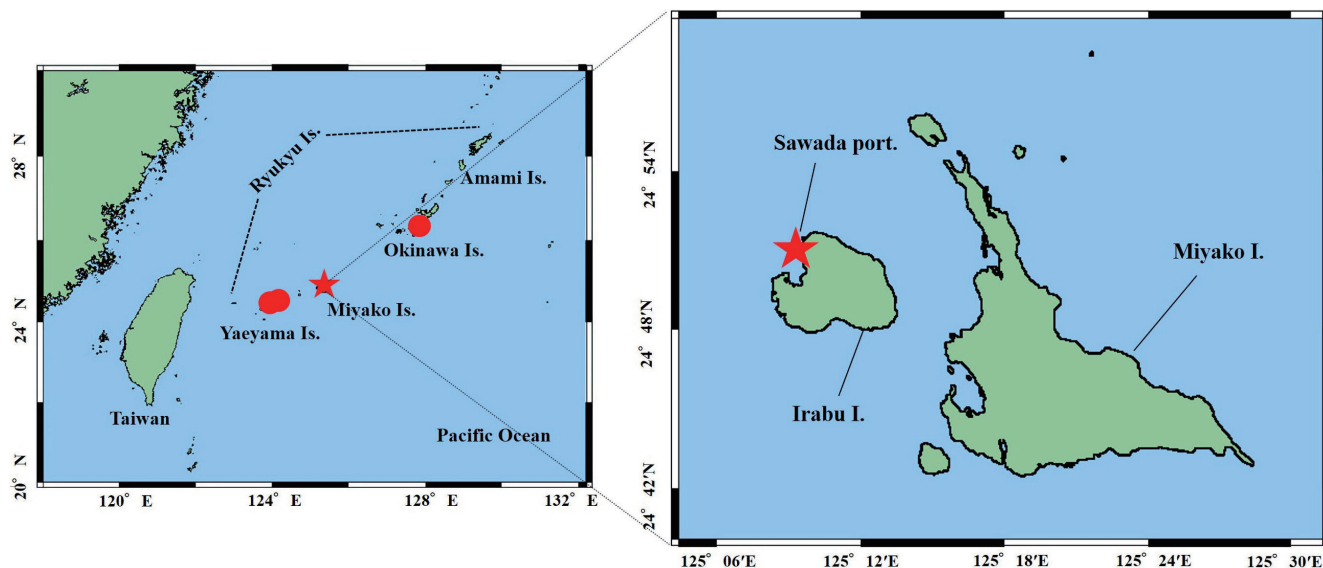


Fig. 2. Distributional records of *Neoniphon argenteus* in Japanese waters. Circles and a star indicate previous and present records, respectively.

側線は鰓蓋上端付近から始まり、体背縁とほぼ平行に緩やかに弧を描きながら尾柄まで途切れずに続く。吻端は眼窩の下から約3分の1の高さに位置する。閉口時、下顎の先端は上顎先端より僅かに前方に突出し、主上顎骨後端は眼窩中央直下に達する。吻端直後から両眼間隔域にかけて、左右共に隆起線がある。ただしその間は溝状にならず、両眼間隔域は窪まない。吻端から両眼間隔域にかけて棘はない。鼻孔は1対で眼の前方に開き、やや上下に長い楕円形。涙骨下縁には細かい棘が並ぶが、涙骨上縁には棘はない。眼窩は正円形でかなり大きく、眼窩径は頭長の約3分の1に達する。瞳孔は僅かに前後に長い楕円。眼下骨の後縁と眼窩後縁部にあたる内縁は鋸歯状を呈する。前鰓蓋骨棘は、明瞭で体軸と平行に後方を向く。前鰓蓋骨の後縁は、その上端付近から前鰓蓋骨棘まで、細かいが明瞭な小棘が続き、前鰓蓋骨棘から下方も同様の小棘が続くため、前鰓蓋骨後縁は全体的に強い鋸歯状を呈する。鰓蓋後端は明瞭な1本の棘となり、その下方にもう1本ほぼ同様の大きさの棘がある。下方の棘よりさらに下方の鰓蓋後縁は滑らかで棘はない。2本の鰓蓋後縁の棘の先端はいずれも二叉しない。鰓耙は中央の1本が最長で、その長さは瞳孔の2分の1程度。上枝鰓耙は、前方から5本はコブ状で、残りの1本は伸長し、その長さは最長の1本の4分の3程度。下枝鰓耙は前方から4本はコブ状で、残りは後方に向かうにつれ次第に長くなる。両顎には絨毛状歯帯をそなえ、歯帯の幅は顎先端付近において瞳孔の3分の1程度で、後方に向かうにつれ狭くなる。犬歯状歯はない。鋤骨に絨毛状歯帯を備える。胸鰭基底上端は背鰭起部よりやや前方の直下、腹鰭起部は背鰭第2棘基部の直下、臀鰭起部は背鰭第3軟条基部直下にそれぞれ位置する。胸鰭は第4軟条が最長で、その後端は背鰭第6棘基部直下に位置する。背鰭棘は、第1棘から第3棘にかけて次第に長くなり、第3棘が最長。第

3棘から第10棘までは次第に短くなり、第10棘が最短で、第11棘は第10棘より僅かに長い。第11棘基部は第10棘基部より背鰭第1軟条基部に近い。背鰭軟条は第1軟条が不分枝でその他は全て分枝する。臀鰭軟条および腹鰭軟条は全て分枝する。背鰭棘部の鰭膜は切れ込むが、後方に向かうにつれ次第に切れ込みが浅くなり、第8棘以降の鰭膜はあまり切れ込まない。背鰭軟条は第3軟条が最長で、背鰭軟条の縁辺はゆるやかな弧を描く。背鰭棘部と軟条部は鰭膜で接続する。背鰭棘部の基部は溝状を呈する。臀鰭第1棘は極めて小さい。第3棘は太く、非常に強固で、臀鰭棘の中で突出して長い。臀鰭軟条は第1軟条が最長で次第に短くなる。臀鰭軟条部の縁辺は直線的。臀鰭を後方に水平に倒したとき、第3棘先端がその後端となり、尾鰭基底直下に届く。腹鰭も第1軟条が最長で次第に短くなるが、軟条部の縁辺は僅かに弧を描く。後方に水平に倒した腹鰭後端は、腹鰭起部と肛門前端の中間より僅かに後方に位置する。尾柄は細く、体高は尾柄高の約3.4倍。尾鰭は、やや深く湾入する二叉形であり、上下葉ともに先端は尖る。上下葉の形態は対称的。臀鰭および尾鰭は、基部から8分の1程度が、それぞれ細かい櫛鱗で被鱗する。吻端から両眼間隔域は無鱗で、背鰭前方の有鱗域は眼窩後端直上にわずかに達しない。その他、吻、主上顎骨側面、下顎腹面は無鱗。

色彩 生鮮時 (Fig. 1) —後頭部および躯幹部の体側の体背縁から3分の1程度は明るい紫みの赤、頭部のうち後頭部を除く眼窩後方並びに眼窩下方および躯幹部の体腹縁から3分の2程度はわずかにピンクがかった白。吻はうすいピンク、主上顎骨はわずかにピンクがかった白、虹彩はわずかに黄みがかった白、瞳は黒。頭部、躯幹部ともに目立つ模様はないが、鱗の光沢がかなり強い〔生時は、頭部の眼の下方に黒色斑が散在し、躯幹部にも同様の黒色斑が

らなる縦方向の数列の斑列が確認された。ただしいずれも、ウケグチイトウダイ *Neoniphon samara* (Fabricius, 1775) ほど明瞭ではない (第1著者による確認)。背鰭, 臀鰭, 腹鰭および胸鰭のいずれも, 棘部, 軟条部ともに白色半透明で特に目立つ模様や斑はない。背鰭棘はうすいピンク, 背鰭軟条は第1–3軟条はさえた赤, 後方の8軟条はうすいピンク。臀鰭棘は第1–3棘が白色半透明, 第4棘はややうすいピンク, 臀鰭軟条は第1軟条がうすいピンクから明るい赤, 第2軟条以降は白色半透明。腹鰭は全体が白色半透明。胸鰭条はほぼ白色半透明だが, 第1–4軟条はややピンクがかかる。尾鰭の上縁・下縁は明るい赤で, 先端に向かうにつれ色彩が濃くなる。尾鰭の上・下縁以外はやや黄みがかかった白色半透明。

分布 本種は, 紅海とハワイ諸島を除くインド・太平洋に分布し (林, 2013), 国内では, 沖縄諸島 (沖縄島), 宮古諸島 (伊良部島) および八重山諸島 (石垣島, 西表島) から記録されている (Shimizu and Yamakawa, 1979; 江口・本村, 2016; 本研究: Fig. 2)。

備考 記載標本は, 背鰭が11棘11軟条であること, 臀鰭が4棘7軟条であること, 胸鰭軟条数が13であること, 背鰭基底中央部における側線上方横列鱗数が2.5であること, 側線有孔鱗数が41であること, 背鰭最終棘が後ろから2番目の棘より背鰭第1軟条の近くに位置すること, 背鰭棘部の鰭膜に黒色斑などをもたないことなどの特徴が, Shimizu and Yamakawa (1979) や林 (2013) の記載した *Neoniphon argenteus* の特徴によく一致したため本種に同定された。

宮古諸島は, これまで本種の国内における分布の空白地帯であったが (Fig. 2), 本研究により分布が確認された。これまで記録のあった沖縄諸島と八重山諸島の間海域にあたる宮古諸島での分布が確認されたことから, 本種は, 沖縄諸島以南の琉球列島に広く分布する可能性が示唆される。

本種の生態にかかる報告は少ないが, 記載標本は, 夜間に本種と同属のウケグチイトウダイ (KPM-NI 89070–89073) と同所かつ同様の採集方法で同時に採集されたことから, 少なくとも夜間における行動範囲は, ウケグチイトウダイと同所的であると考えられる。また記載標本以外にも, 本種は同時に複数個体が採集されたことから, 宮古諸島における本種の記録は偶来的なものではないと考えられる。

謝 辞

神奈川県立生命の星・地球博物館において記載標本の作製・管理に多大なる御協力をいただいた同館の魚類ボランティアの皆様と, 本稿に対して適切な指摘をいただいた査読者である一般財団法人沖縄美ら島財団の宮本 圭氏に対し, この場を借りて深く敬意と感謝の意を表する。本研究の一部は JSPS 科研費 (24K16204) の援助を受けた。

引用文献

- 江口慶輔・本村浩之. 2016. 琉球列島におけるイトウダイ科魚類相. *Nature of Kagoshima*, 42: 57–112.
- 林 公義. 2013. イトウダイ科, pp. 579–591, 1897–1899. 中坊徹次 (編). 日本産魚類検索 全種の同定. 第3版. 東海大学出版会, 秦野.
- 本田康介・和田英敏. 2025. 父島から得られた小笠原諸島初記録のイトウダイ科コガシラエビス. *タクサ*, 58: 34–40.
- 本村浩之. 2025. 日本産魚類全種目録. これまでに記録された日本産魚類全種の現在の標準和名と学名. Online ver. 31. [URL](https://www.kaiyodokoro.co.jp/ichthyology/) (18 July 2025).
- Randall, J. E. 1998. Revision of the Indo-Pacific squirrelfishes (Beryciformes: Holocentridae: Holocentrinae) of the genus *Sargocentron*, with description of four new species. *Indo-Pacific Fishes*, 27: 1–105.
- Shimizu, T. and T. Yamakawa. 1979. Review of the squirrelfishes (subfamily Holocentrinae: order Beryciformes) of Japan, with a description of a new species. *Japanese Journal of Ichthyology*, 26: 109–147.
- 財団法人日本色彩研究所. 1993. 改訂版, 色名小辞典, 改訂版第12刷. 日本色研事業株式会社, 東京. 90 pp.